

The Historical and Literary Institutes, Libraries, Archives and Museums in USSR

—A report from Moscow, Leningrad and Vilnius, 1976~1977—

Yoshio IMAI

The author visited USSR from June 1976 to April 1977 as an exchange member of scholars between Japan and USSR. He worked in some historical and literary institutes of the Academy of sciences USSR, libraries, archives and museums in Moscow, Leningrad and Vilnius for his historical survey on Russian modern history.

This is a brief report on the present situation and activities of the following institutions.

[Moscow]

The Institute of History of USSR of the Academy of Sciences USSR.

The National Library named V.I. Lenin

The Institute of Scientific Information on Social Sciences of the Academy of Sciences USSR

The National Library of History

The National Literary Museum of A.I. Herzen

[Leningrad]

The Institute of Russian Literature of the Academy of Sciences USSR (The Pushkin Dom)

The Pushkin Memorial Museum

The Library of the Academy of Sciences of USSR (BAN)

The M.V. Lomonosov Memorial Museum

The National Public Library named M.E. Saltykov-Shchedrin

The Central National Historical Archiv

[Vilnius]

The Library of the Academy of Sciences of Lithuanian SSR

The National Historical Archives of Lithuanian SSR

今 井 義 夫

ソ連邦における歴史・文学研究所、 図書館、文書館および博物館の現状

——モスクワ、レニングラード、ヴィリニウスを訪れて——

今 井 義 夫

日本とソビエトの政府間で学術研究者の交流制度がはじまってまだ日は浅い。筆者の知る範囲でも欧米諸国とソ連との間の研究者の交流はすでに10年以前にはじまっておりその人員もアメリカ、イギリス両国の場合は毎年わが国の2倍をこえる20人以上の規模で行われてきた。このことゝ両国のロシア、ソビエト研究の水準の高さや国際性、収集資料の豊かさとは密接な関係をもっていると考えられる。

従来、日本におけるロシア、ソビエト関係の研究にとっての最大の難関のひとつは、研究者が現地やその資料を直接しらべる手段に乏しく、ソビエトの専門研究者たちとの意見の交換の機会にもあまり恵まれなかったことであった。

もっとも、これまで日本でも、語学研修会への参加という資格でモスクワ大学などの語学セミナーに参加する機会は開かれていたし、二、三の大学ではソビエトの大学との間に個別的な研究者交換留学制度をもっていた。また1973年からはようやく日ソ歴史家研究シンポジウムも開催されるようになった。しかし、政府間協定によるソ連邦科学アカデミーの研究機関との本格的な交換留学制度は実質的にはこゝ二、三年の間に一般の研究者の利用のために開かれたばかりであった。

筆者はこの日ソ間の学術研究者の交流協定にもとづく日本学術振興会の海外派遣研究者の一員として1976年6月から10ヶ月にわたってソ連邦科学アカデミーの研究機関に留学する機会を得た。本報告はその間、筆者が自ら研究調査に当たったモスクワ、レニングラード、およびリトワニア社会主義共和国の首都ヴィリニウスでの研究所や図書館、文書館、博物館のうち主なものについて、その概況と利用法を記したものである。今回の報告はスケッチ的に要点を記すにとどめ、本格的な調査報告はもち帰った資料の整理のうえで機会をあらためて発表するつもりである。しかし、このようなささやかな報告でも、まだソビエトの研究施設の現状についての情報の乏しい日本では有益な点もあろうかと思う。この報告が日ソ間の文化交流の今後の発展にとって幾分

ソ連邦における歴史・文学研究所、図書館、文書館および博物館の現状

なりともお役に立つことになれば幸いである。

この報告でとりあげたモスクワ、レニングラード、およびヴィリニユスの歴史・文学研究機関、図書館、文書館、博物館は次のようなものである。

〔モスクワ〕

科学アカデミー・ソ連邦史研究所

レーニン各称国立図書館

科学アカデミー・社会科学情報研究所

国立歴史図書館

国立ゲルツェン博物館

〔レニングラード〕

科学アカデミー・ロシア文学研究所

プーシキン住居・博物館

科学アカデミー図書館

ロモノーソフ博物館

サルトウイコフ・シチェドリ名称国立公共図書館

中央国立歴史文書館

〔ヴィリニユス〕

リトワニア科学アカデミー図書館

リトワニア国立歴史文書館

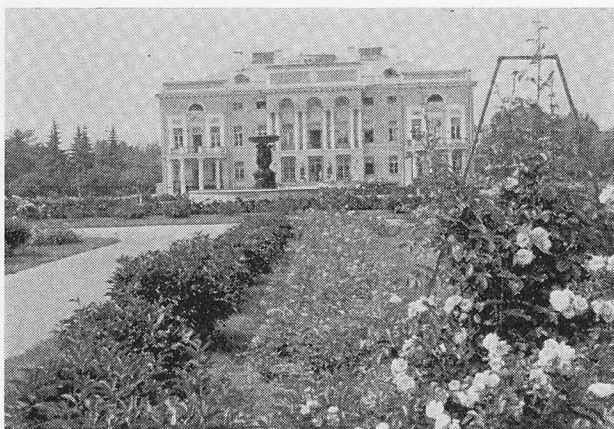
〔モスクワ〕

ソ連邦科学アカデミー・ソ連邦史研究所

(Институт истории СССР, АН СССР)

ソ連邦科学アカデミーの前身の帝制ロシア時代の科学アカデミーはピョートル大帝の1724年の勅令によってサンクト・ペテルブルク（現レニングラード）に設立され、翌1725年から活動をはじめている。252年におよぶその歴史はパリのアカデミー（1666年創立）やベルリンのアカデミー（1700年創立）につぐもので、以後ロシアの学術研究の発展に指導的役割を果たした。1917年の革命後もソビエトの最高学術機関として活動し、1925年から今日のようにソ連邦科学アカデミーと呼ばれるようになり、1934年からは創立以来のレニングラードからモスクワに本部を移転した（写真1）。

1974年の時点でアカデミーの正会員は237名、通信会員439名を数え、60人余の外国人会員を擁して世界的な学術機関となっている。科学アカデミーの最高機関はこれら



(写真1) ソ連邦科学アカデミー本部
(モスクワ 1976年 筆者撮影)

正会員、通信会員による総会であるが、そのもとには四つのセクションと、さらにそれぞれに属する数個の専門部門がある。四つのセクションとは、1. 物理的技術と数学セクション、2. 化学的テクノロジーと植物学セクション、3. 地球関係科学、4. 社会科学である。

社会科学のセクションにはさらに歴史部門、哲学および法律部門、経済部門、文学と言語の四部門に分けられ、それぞれの部門が各種の研究所やその他の施設をもっている。

筆者が約6ヶ月のモスクワ滞在中に所属していたソ連邦史研究所は、世界史研究所、考古学研究所、東洋学研究所、芸術史研究所、物質文化研究所、スラブ学研究所などとともに科学アカデミーの社会科学セクションの歴史部門に属する研究所のひとつであった。

ソ連邦史研究所の現在の所長はソ連の国際関係史の権威でアカデミー正会員であるナロチニッキー (А.Л. Нарочницкий) 博士で副所長の一人はキム (В.П. Ким) 博士である。両氏とも1973年12月に東京でひらかれた第一回日ソ歴史家シムポジウムにソ連側代表として来日されたことがある。

この研究所の研究組織としては次の20のセクションやグループがあり、大体はそれぞれの研究室をもって活動している。

- 1) ソ連邦領土内の古代国家史セクション
- 2) 封建時代のソ連史セクション
- 3) 歴史学史のセクション

- 4) 歴史地理学セクション
- 5) 史料および補助歴史学セクション
- 6) 大十月革命と市民戦争史セクション
- 7) 工業化史セクション
- 8) 農業の社会主義化史のセクション
- 9) 大祖国戦争史セクション
- 10) ソビエト文化史セクション
- 11) ロシア年代記全集研究セクション
- 12) 1859～1861年のロシアにおける革命的状況研究グループ
- 13) ソ連邦諸民族史の一般的諸問題セクション
- 14) 史料研究の数学的方法実験室
- 15) ソビエト政府の外交政策史セクション
- 16) ソ連邦における社会主義的 および 共産主義的建設史の総合的諸問題セクション
- 17) ソビエト社会に関する外国歴史文献グループ
- 18) 史的・社会学的研究グループ
- 19) 資本主義期のソ連邦史セクション
- 20) ブルジョア民主主義革命セクション

ブレジネフ氏のよびかけで、国をあげて生産の質的向上を目ざしている現在のソ連邦では、この研究所でもナロチニッキー所長の名のもとにこの国家的要請にこたえるべく研究成果の質的向上をはかる旨が掲示されており、研究所内には1978年度の具体的な研究出版計画なども示されていた。

こうした研究の計画性や集団性は社会主義国での研究活動の特色であろう。さらに、女性の研究者が多いことと研究者間の学術的討論が極めて活発なことは日本の大学からの来訪者には印象的であった。

この研究所の広汎な活動のすべてにふれることは外国からの一時的滞在者にとっては不可能であったが、研究所の渉外係マルチノフ氏（А. Мартинов）やストレリニコヴァ女史（Л. Стрельникова）の助力によって筆者の関心をもっていたテーマに関連する研究者や研究セクションとの交流をすることができた。そのうち主な人物やセクションは次のようなものである。

「1859～1861年のロシアにおける革命的状況」の研究グループは同名の研究論文シリーズの出版で知られている。アカデミー正会員ネーチキナ女史(М.В. Нечкина)は75才の高令にもかかわらず時々この研究グループの指導と研究論文集の編集責任者としての仕事のために研究所にいられていた。女史ははじめて会うという日本からの研究者との面会にも快く応じられて、同グループの活動状況や彼女の歴史研究の出発点となった帝制時代の歴史家クリュチューフスキーについての彼女の近年の大著について話をしてくれた。

ネーチキナ女史を助けて、この研究グループで指導的役割を演じているルドニーツカヤ女史(Е.Л. Рудницкая)の話では、このグループはひきつづきその研究論文シリーズの出版の仕事をすゝめているほか、ネーチキナ女史の指導のもとにかつて出版したゲルツェンの出版物『コーロコル』のジュネーヴでのフランス語版の復刻版の出版を準備中である。またゲルツェンの出版物『ロシアからの声』の復刻版の仕事がようやく完結したので、当時のロシアの自由主義派をふくめた社会的動向についての研究も進むであろうということであった。

ルドニーツカヤ女史自身の研究業績としてはオガリョーフについての論文やモノグラフイーがよく知られているが、最近では1860年代のあまり知られていなかった革命的活動家でダーウィン主義者であったニコライ・ノージン(Николай Ножин)のモノグラフイーを出版している。

資本主義期のソビエト史セクションにはナロードニキ研究でわが国にも知られているイッテンベルク教授(Б.С. Итенберг)とトヴァルドーフスカヤ女史(В.А. Твардовская)がいる。イッテンベルク教授はひきつづき1880年代のナロードニキ運動家たちについての研究をすゝめている。最近のトヴァルドーフスカヤ女史は1860年代に自由派から反動派に転じた思想家カトコフの研究を発表していた。この時代のロシアの社会思想の多様な姿をしらべたいとねがっていた筆者にとってはこの両氏の助言はきわめて有益であった。ゲルツェンとチェルヌイシエフスキーのロンドン会見をめぐるネーチキナ＝コジミン論争で両氏は後者を支持したと語っておられた。また筆者の質問に答えてルドニーツカヤ女史が、ロシア自由主義者に関する諸論文をあげて、ソ連の史学界での研究成果を示してくれたが、イッテンベルク教授はそれらが必ずしも充分ではないことを認めていた。

キム教授の主催するソビエト文化史研究グループはこの研究所でも比較的新らしく、活発なグループで、ソ連内の各共和国の歴史研究者と緊密な連絡をとりながら、十月革命後の諸民族共和国における文化革命の史的研究所とその総合を目指していた。

同教授の説明によれば、ソビエト期の文化史研究は学術的には戦後1956年以降にはじまった新しい研究領域である。目下、その基礎的な事業として、ソビエト文化史年表の作成に努力中で、すでに1930年代をふくむ第二巻までが完成し、第三巻の出版が予定されていた。将来の目標としては、比較文化史的研究によって、ソビエト文化史の世界史的な意義をあきらかにしようということであった。

ソ連邦史研究所の建物はモスクワの南部の科学アカデミーの地域の一角にある四階建の建物の中に世界史研究所や考古学研究所と同居しており、その三階全部を占めている。建物自体はさほど大きなものではなく多くの研究グループの活動にはすでに手狭で、所長のナロチニッキー博士やキム教授やミンツ教授などの著名な学者以外には研究者用の個室は少なく、研究室はグループのメンバーの共用であった。目下、より広い研究所用の建設が進行中で、遠からずそちらへ移転する予定とのことであった。

研究所の一階の図書室はこの建物に入っている三つの研究所のメンバーに研究文献資料の貸出や閲覧サービスを行う重要な役割を果たしている。閲覧室のほか、文献調査室と文献収集・分類・カード化作業室があり、それぞれ3～4名のライブラリアンが作業にあたっている。文献調査室には書誌的資料が豊富にとり揃えられており、専門的な訓練を受けたライブラリアンが必要文献の調査について助力してくれる。とりわけ、ここで閲覧できたロシア史の個別的テーマについての図書館用の限定版文献目録は便利であった。たとえば、筆者の利用し得たものとして次のようなものがある。

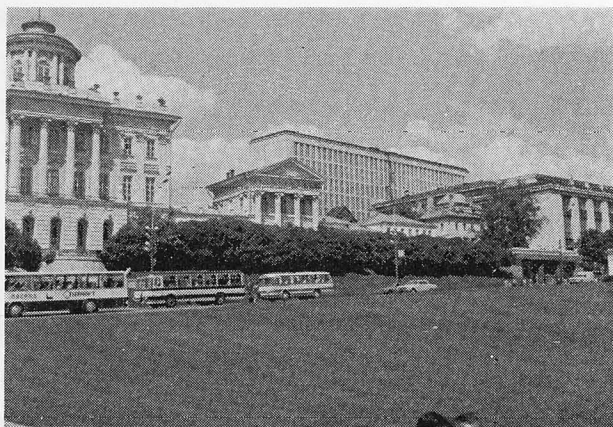
『1953年から1970年までのソビエト研究者たちによる労作のなかのナロードニキ主義・モスクワ、1971年（限定500部）』^{注1)} および『デカブリスト運動—ソ連邦中央国立軍事史文書館の文献フォンドとコレクションへの人名索引目録—1975年（全三巻、1,600部限定版）』^{注2)}。因に前著の編集はイッテンベルク教授のもとでこの図書館の二人のライブラリアンが実現したものである。

注 1) “Народничество в работах советских исследователей за 1953~1970 г.г.,” Указатель литературы, Сост. Н.Я. Крайнева, П.В. Пронина, Москва 1971.

2) “Движение декабристов,”—Именной указатель к документам фондов и коллекций ЦГВИА СССР, Под ред. И.Г. Тишина, выпуск 1-III, Москва 1975.

レーニン名称国立図書館（Государственная библиотека имени В.И. Ленина）

モスクワの中心部、クレムリンにほど近いレーニン名称国立図書館はソ連邦最大の図書館であるばかりでなく、アメリカ合衆国の国会図書館と並んで、世界で一、二を



(写真2) レーニン名称国立図書館 モスクワ
(左手前が旧館 右手が新館 筆者撮影 1976年)

競う大図書館である。この図書館については日本人の研究者の間でもかなり知られており、筆者も別の機会にその利用方法について紹介したことがあるので、^(注)ここでは比較的知られていない貴重文献室とマニュスクリプト室の状況について記すにとどめたい。

この図書館の貴重文献室は本館の第2号棟の3階にあり、貴重書展示室に隣接した部室である。これはロシア語以外の出版物をふくめた稀観書や貴重なパンフレット類が収蔵されていて、研究者たちの利用に供されている。入口のカード室には人名および事項に分類されたカードが備えられている。その奥の専用閲覧室(約30席)で文献の閲覧が許される。書物の持出しは一切禁じられているが、ライブラリアンを通じて希望する文献のマイクロフィルムを申請することができる。

筆者の目にふれたものとしてはゲルツェンとオガリョーフのロンドンでの出版物のコレクションやクリミア戦の敗戦時にチチェーリンがロシア国内で出版した匿名のパンフレットなどのめずらしいものがあつた。

マニュスクリプトの部門(РОГБЛ)は図書館の旧館にあり、その閲覧には特別な手続と許可が必要とされる。こゝは中世の教会文書からマルクスの書簡にいたるまでの手稿類の宝庫であり、ぼう大な分類カード(人名、件名)のなかから貴重な原資料を見つけて閲覧することができる。筆者の関心の範囲ではゲルツェンやオガリョーフおよびカヴェーリンらを主としてしらべたが、ゲルツェンの活動についての当時のヨーロッパ諸国の新聞紙上での反響の切抜コレクションなども含んでおり、単に手稿だけでないようであつた。こゝでの資料の保存と取扱いはとりわけ厳重で、専用閲覧室

での閲覧や手写はともかく、マイクロフィルムへの申請は所属の研究機関の認可を必要とし、その入手は容易ではない。

概してソ連の図書館ではマイクロ・サービスはかなり利用できるようになっているが、ゼロックス・サービスの面はまだ遅れている。レーニン名称図書館ですら一人一回についての申請は20枚程度に制限されていて不便であった。

注 「ソ連邦科学アカデミーとの学者交換制度により訪ソされる方への手引」 在ソ連邦日本国大使館刊、1977年3月

社会科学情報研究所 (Институт научной информации по общественным наукам, 略称 イニオン ИНИОН)

科学アカデミーの社会科学セクションに付属する全国的な社会科学の情報センターで1961年から1974年にかけて設立された。設立されて間もないこのセンターはソ連におけるこの種の施設のうちでももっとも新しいもので、この国の社会科学研究機関の近代化の努力を象徴するものといえよう。この注目すべき情報研究所の存在についてわが国ではまだほとんど知られていないので、やゝ詳しく紹介したい。



(写真3) 社会科学情報研究所付属図書館
(モスクワ 1976年秋 筆者撮影)

ユネスコの資料によれば毎年、世界中で発行される社会科学関係の書籍や論文は約百万点に達しているという。このようなぼう大な文献資料についての科学的な情報を提供する機関としてつくられたのがこの研究所である。その主な機能について同研究所が発行している案内パンフレットは次のように記している。

- 1) 学術研究機関、高等教育施設および政府機関、公共機関へのインフォメーション・サービス
- 2) ソビエトおよび諸外国の社会科学関係文献の収集と要約
- 3) 学術文献の調査、要約および文献目録の出版
- 4) 諸外国の学術情報センターとの連携の促進

モスクワ市の東方、科学アカデミー地区のなかに新設のイニオンの本部がある。地下鉄のプロフサユース駅を降りて路面に出ると目の前に付属図書館の建物を中心とした近代的な建築物がひろがっており、1976年の秋もまだその一部は建設中であった。

(写真3参照)

大噴水池に面した図書館の二階は読書室が並んでいる。ソビエトではめづらしい採光のよい、明るい建物内部には経済、歴史、地理、など各種部門に別けられた大閲覧室があり、専門研究者や大学院学生などの利用する姿が見られた。カード・システムもよく整っており、とくに便利なのは、レファレンスルームに専門的訓練をうけた学術協力者がいて、研究者の要請によってはライブラリアンの部屋におかれている個別テーマについてのカードを参照させてくれることである。筆者のテーマについては、アレクセーエヴァ女史 (А. Алексеева) が専門で、最近のソ連における雑誌論文から学位論文にいたるまでの文献カードを示してくれた。社会科学に関する定期刊行物はよく取揃えられているが、他の学術機関や図書館との文献の貸借の仲介もしてくれて便利である。

この研究所での事業のひとつは文献の要約を出版していることである。『ソ連邦における社会科学文献レジюме』(7シリーズ)と『外国社会科学文献レジюме』(9シリーズ)(いずれも『P・Ж』と略称される)のレジюме雑誌は専門家によって要約された文献案内を内容としてそれぞれ年4回ずつ発行されている。

この研究所が力を入れている事業のひとつとしてソ連邦内の各共和国の社会科学関係の研究機関や公共機関への情報提供、および、社会主義諸国の科学アカデミーとの情報交換の仕事がある。マイクロフィルム・サービスも行っており、文献の整理や調査についてはコンピューターも使用されているという。図書館の建物には録音室やマイクロリーダー室、各種会議室や簡易レストランもあって、モスクワでは新様式の外国文献図書館 (Библиотека иностранной литературы) とともにもっとも快適な図書館のひとつとなっている。

新しい図書館ではないが、歴史研究者にとって便利なモスクワの図書館としてはスタロサートスキー・ペレウロクに国立歴史図書館（Государственная историческая библиотека）がある。こゝには帝制時代からの各種定期刊行物が豊富に所蔵されていて、ゼロックス・サービスも行われている。

ゲルツェン博物館（Музей А.И. Герцена）は1976年にモスクワに設立されたばかりのロシアの社会思想家アレクサンドル・ゲルツェンを記念する新設の博物館である。ソビエト外務省の裏手、イタリア大使館の近くにあるこの博物館はまだ1977年版の旅行案内や地図の上にも示されていない。建物はゲルツェンが1843年から1846年にかけて住んでいた建物で、展示場にはゲルツェンの生涯とその時代にかゝる各種の歴史的資料が陳列されている。

ゲルツェンの「自由ロシア出版所」からの出版物や、彼の友人たちの手稿なども豊富に揃えられていて、ゲルツェンのみならず、同時代のロシアの社会や文化についての貴重な博物館となっている。案内を乞うと、専門的な係員が展示物について懇切な説明をしてくれる。しかし、博物館内での写真撮影は禁じられていたし、まだ、案内用のパンフレットなどもできていない状態であった。

同様にソビエトの文芸批評家で初代の文部大臣ルナチャルスキーの記念室がモスクワ市内に最近設立されたということをルナチャルスキーの娘さん（И.А. Луначарская）から聞いた。その記念室のために筆者はルナチャルスキーの著作の最近の日本語訳（藤井訳、原訳）を彼女に託した。

ゲルツェンとルナチャルスキーの記念室がそれぞれ最近になって設立されたことはソビエトの国民の間のロシアにおける市民的自由思想の伝統への関心のたかまりとを示しているように思われて興味深い。

〔レニングラード〕

科学アカデミー・ロシア文学研究所（Институт русской литературы АН СССР 通称プーシキン・ドーム Пушкинский Дом）

レニングラードの科学アカデミー・ロシア文学研究所は詩人プーシキンの名を冠したプーシキン・ドームという名で呼ばれることが多い。もともと1905年にプーシキンの研究のためのセンターとして設立され、革命後の1930年に科学アカデミーのロシア

文学の研究機関として改組されたといういきさつがあるからである。

研究所には、古代ロシア文学セクション、近代ロシア文学セクション、ソビエト文学セクション、民衆の詩的作品セクション、ロシアと外国文学との相互関係セクションの五つのセクションがあり、これに加えて、図書館、文学博物館、マニュスクリプト部の三つの部門がある。

ロシア文学研究のメッカともいふべきこの研究所はレニングラードでももっとも旧都の面影を残しているヴァシリー島の東端、ネヴァ川に臨む旧税関の建物のなかにある。(写真4参照)



(写真4) 科学アカデミー・ロシア文学研究所
(レニングラード 1977年春 筆者撮影)

この研究所の革命後の最初の所長はルナチャルスキーであり、作家ゴリキーもその設立に参加している。その後も数多くの著名な文学研究者たちがこゝで働き、すでに『ロシア文学史』(全十巻)、『ロシア批評史』(全二巻)、『ロシア・ソビエト長編小説史』(同)、『ロシア詩史』(同)をはじめとする多数の研究成果の編集出版によってその名声は国内にとどまらない。この研究所はロシアの著名な作家の科学アカデミー版全集の編集によっても知られている。目下、チェホフ、ドストエフスキーの新全集の出版が進められている。

1977年1月から4月にかけての4ヶ月にわたるこの研究所への留学期間中に筆者は少なからぬ研究者たちと交流し、その豊富な文献コレクションを自由に利用する機会を与えられた。それにはプーシキン・ドームの渉外係エフドキーモフ氏(Н.Т. Евдокимов)の尽力に負う点が多い。

筆者はこの研究所ではロシアの民話・民謡の研究の権威であり、チェルヌイシエフスキーやドブロリユーポフの研究家としても知られるバザーノフ教授(В.Г. Базанов)の指導を期待していたが不幸にして教授は心臓病の療養中で会見の機会を得られなかった。

「18世紀研究室」は18世紀のロシア文学や社会思想についての研究シリーズ、『18世紀(XVIII BEK)』の編集で知られているが、初代の室長ベールコーフ教授(П.Н. Берков)が近年亡くなつてからはマカゴネンコ教授(Г. Макагоненко)がひきつぎ、すでに第11巻、ノヴィコーフ特集(1976年)と第12巻、ラヂーシチェフ特集(1977年)を発行している。

この論文集の編集と執筆に当たっているカチェトコーヴァ女史(Н. Кочеткова)はベールコーフ教授の弟子でカラムジーンの研究家として知られ、そのカラムジーン伝は英訳されてアメリカで出版されている。この研究室にはロモノーソフの研究家として知られているモイセーエヴァ女史(Г. Моисеева)も加わっており、全部で五人の小じんまりとした研究グループではあったが、彼らの助言は筆者の研究には大いに役立った。

19世紀のロシア文学研究については、目下ドストエフスキー全集の編集に従事しているトゥニマノフ氏(В. Туниманов)からの助力を得ることができた。

この研究所の図書館のロシア・ソビエト文学関係の蔵書は実に豊富で、その総数は50万冊を越えるといわれる。ベテランのライブラリアンは関連文献にも通じていてマイクロフィルム作製のための協力も惜しまなかった。

図書室と並ぶ手稿部門も独立した閲覧室をもっていて、研究者への便宜をはかっていた。その所蔵するコレクションはプーシキンの手稿類をはじめ、デェルジャーヴィン、クリーロフ、ルイレーエフ、レールモントフ、ゴーゴリ、チャアダーエフ、ペリンスキー、ゲルツェン、バクーニン、アクサーコフ、チェルヌイシエフスキー、トゥルゲーネフ、ドストエフスキー、ネクラースフらのロシア文学の巨匠たちから、エセーニン、A. ブロークなどソビエト時代の作家の手稿を含む貴重なものである。

その他貴重な文献としては古代・中世ロシアの文書や初期の印刷物のコレクション、ロモノーソフの著作、ノヴィコーフやカラムジーンの出版した各種の雑誌などが所蔵されている。また、この研究所にはフォルクローアの研究室があってそこには3万点をこえるソ連邦の諸民族の民謡・民話などの印刷・録音資料が集められている。

この建物の中央を占めるロシア文学博物館にはロシア文学に関する豊富な資料が陳列されて、一般に公開されている。それらのなかでも、筆者にとってはデカブリスト

関係の豊富なコレクションと第二次世界大戦中のソビエトの作家たちの包囲下のレニングラードでの活動を示す資料がとりわけ興味深いものであった。

プーシキン記念住居・博物館 (Музей-квартира А.С. Пушкина)

プーシキン・ドームに関連して、レニングラードのプーシキンの旧居に設けられているプーシキンの記念館について一言紹介しておくことはロシア文学の愛好者にとって有益なことであろう。それはレニングラード市の中心を横切るモイカ運河のほとりに日本領事館と運河をはさんで建っている。この建物の中の一室でプーシキンは1837年2月10日(旧暦1月29日)に息をひきとった。1925年の命日にかつてプーシキンが住んだ七室に、詩人の遺品や家集を並べて往時を復元し、記念博物館としたのである。この博物館の周囲の建物はやはり当時のままの姿をとどめるべく保存されていて、プーシキンの生きた時代をしのぶことができる。

詩人の命日である2月10日には毎年この建物で詩人をしのぶ記念のつどいがある。1977年はとくに没年の140周年にあたり、筆者も招かれてその式典に参加した。式場はプーシキンが決斗のあと傷いた体を三日間横たえ、息をひきとった革張りの長椅子のある書斎で、周囲にはすでに来賓や市民たちが300人ほどつめかけていた。館内に入れない市民たちは廊下や雪の積った中庭や街頭にまであふれて、スピーカーから流れる式典の様子に耳を傾けている。式典は博物館長の挨拶にはじまり、ロシア文学史家ブルソフ教授(В. Бурсов)の記念講演のあと、舞台俳優によるプーシキンの詩の朗唱があった。式典の間、少年聖歌隊による合唱が流れ、参列者たちのなかで二、三人の婦人たちがしきりに涙をぬぐうのが目についた。この式典に参列してプーシキンがいまだにレニングラードの市民たちの心のなかに生きつづけている事実を強く印象づけられた。

参考文献

Музей-Квартира А.С. Пушкина, Изд-во „Аврора“. Ленинград, 1976

ソ連科学アカデミー図書館 (Библиотека академии наук СССР 略称 БАН)

レニングラードのヴァシリー島のレニングラード大学の隣りに科学アカデミー図書館がある。1714年にピョートル大帝の命令によって設立されたロシアで最初の国立図書館である。1725年に科学アカデミーの設立にともなってその付属図書館となった。

本館の蔵書は1970年で800万冊を越え、レニングラード市内にある科学アカデミーの各種付属施設の図書館29の蔵書をふくめると1,250万冊におよぶ。利用者は本館だけでも年間3万人を超えるといわれ、マイクロ・サービスもよい。

この図書館の創立250周年に発行された次の図書館史はこの国の図書館制度の発展を知る上でも有益である。

“История Библиотеки Академии Наук СССР, 1714~1964” Изд-во „Наука“ М.-1964-Л.

ロモノーソフ博物館 (Музей М.В. Ломоносова в Ленинграде)

ロモノーソフ (1711~1765年) はロシアの平民の出身でありながら、創設間もない科学アカデミーで活躍し、その多才さと努力によって輝かしい成果をあげ、ロシアの科学と文学の父とまで讃えられている。彼の生涯を記念するこの博物館は第二次大戦後、科学アカデミーの会長セルゲイ・ヴァヴィーロフ博士 (С. Вавилов) の提唱で1949年1月に科学アカデミー自然科学・技術史研究所の付属施設として設立された。^{注1)}

博物館はネヴァ河に面したヴァシリー島の旧科学アカデミー本部 (現在、科学アカデミー・レニングラード支部) と並んで建っている旧クンストカーメラの建物の中央部分を占めている。この建物は科学アカデミーの付属の博物館として1717年に起工され、ロモノーソフ自身が働いたこともある由緒ある建物である。1747年の火災によって中央の塔の部分が失われたが、その後、ヴァヴィーロフ博士の要請によって創立当時の姿を復元し (1947年)、その塔の部分を中心としてロモノーソフ博物館がつくられたのである。建物の他の部分は人類学・民族学博物館 (Музей антропологии и этнографии) となっている。(写真5参照)

ロモノーソフ博物館はロモノーソフの生涯とその時代のロシアの科学・技術を知ろうえて貴重な資料を収集・展示している。そのうちでも筆者が興味深かったのはロモノーソフが考案し、使用した各種の実験道具や、自らの開発したモザイク材料によってつくったピョートル大帝とエカテリーナ女帝の肖像画、彼が設立して質料不変の実験を試みたりしたロシア最初の化学実験棟の模型などである。

この博物館には当時使用された各種の天体観測用の機器も陳列されているが、そのうちの天球儀は寛政年間にシベリアを経てペテルブルクに送られてきた仙台の漂流民たちが見物して、日本に帰還してから藩の聴取に答えてその形状を報告しているも



(写真5) ネヴァ河を経てヴァシリー島を臨む。
中央の建物の塔の部分がロモノーソフ博物館
左手の列柱のある建物は旧科学アカデミー本部
(筆者撮影 1977年3月)

のである。^{注2)}

この博物館の編集で、ロモノーソフに関する研究論文シリーズが1940年から刊行されており、目下その第八巻が1977年12月に出版されようとしている。^{注3)}

今回10年ぶりに訪問したところ、長らく館長をつとめていたチェナカル博士は病気で療養中であり、代ってソコロヴァ女史 (Н.В. Соколова) とゴロジーンスカヤ女史 (Р.Б. Городинская) が博物館の運営と論文集の編集事務をあづかっていた。

注 1) 拙稿「М.В. ロモノーソフと創立期のペテルブルグ科学アカデミー」；『工学院大学研究論叢』第4号1965年 pp. 21~92参照

2) 大槻玄沢 共著『環海異聞』1807年
志村弘強

3) 筆者が、館長チェナカル博士 (В.Л. Ченакал) の要請によって調査した「日本文献にあらわれたエム・ヴェ・ロモノーソフ (М.В. Ломоносов в японской литературе)」も露訳されてそのなかに収録されることになっている。『工学院大学研究論叢』第5号、1966年所収

サルトゥイコフ-ンチェドリ ン 名称国立公共図書館 (Государственная публичная библиотека имени М.Е. Салтыкова-Щедрина；通称・公共図書館、Публичная библиотека)

1814年に設立されたロシアで最初の無料公共図書館である。レニングラードの目抜き通りネフスキーの中程に循環道路に面して建っている。革命後はロシアの進歩的な

作家サルトウイコフ・シチェドリンの名を冠し、ソビエト第二の図書館として今日では1,500万冊を超える蔵書を誇っている。

レニングラードの古都の面影を保つためにこの図書館も古い建物に改修を繰り返しながら使用している。古典的な建物の内部はすでに手狭となっていて、週末の読書室は利用者であふれ、空席を見出すのもむずかしい。閲覧室は一般の大読書室以外に部門別の読書室があり、ライブラリアンのサービスもよい。新刊書の展示や各種の記念日にあたっての関連文献の特別展示など読者への教育的配慮もゆきとどいている。専門的なライブラリアンが新刊展示室の一角で読者に文献調査上の相談に応じてくれる。

この図書館の一階には版画保存室があり、60万点を超える複製絵画、版画、プラカード、アルバム、写真、絵はがきなどが集められている。そのうちでも17～18世紀のロシアの民衆版画（ルーブカ）のコレクションは貴重なものである。筆者の訪問中には1917年革命直後の各種のポスターが展示されていて、史料的にもきわめて興味深いものであった。

二階の一角には貴重書の閲覧室があり、一階にはマニュスクリプトの閲覧室がある。いずれも貴重なコレクションと専門的ライブラリアンをもっていて、この図書館の長い伝統を思い起させる。

筆者の目にとまった資料としてはクリミア戦後にロシア国内で手写されて回読された自由派貴族たちの農奴制改革私案の手稿類などである。

この図書館でのマイクロ・サービスは国際交換制をたてまえとしていて、こちらの注文にたいする先方の日本語文献についてのマイクロの等価交換要求を受け入れねばならない。手続上面倒であるし、貴重書やマニュスクリプトのマイクロ注文は断わられる場合が少くない。ゼロックス・サービスもモスクワの場合より悪く、一人一回10枚ほどに限られ、利用者の行列が絶えない。ソビエトの伝統的な図書館で見られる共通の欠点のひとつはこの種の機械設備の導入の遅れと、手続きの繁雑さである。

この図書館には有名なヴォルテール文庫（Библиотека Вольтера）がある。エカテリーナ女帝がヴォルテールの没後その遺族から購入した約7,000冊の蔵書はヴォルテールの坐像のある冬宮の特別室に収められていたが、その後この公共図書館に移され、一階の書庫に保管されている。その全容については碩学アレクセーエフ（М.П. Алексеев）のライフ・ワークとしてのカタログが出版されている。^{註）}目下、この文庫の保管係をしているアリビーナ女史（Л. Альбина）によって蔵書へのヴォルテールの書き込み

の調査がすゝめられている。すでにアメリカの学者によってルソーの著作への彼の書き込みの一部が調査されて発表されているが、彼女はさらに広汎な範囲にわたってしらべており、その成果の刊行が期待される。

注) М.П. Алексеев; „Библиотека Вольтера,” Каталог книг
Изд-во АН СССР, М.-1961-Л.

国立中央歴史文書館 (Центральный государственный исторический архив СССР
в Ленинграде 略称、ツギアル ЦГИАЛ)

レニングラードのデカブリスト広場に面した旧元老院の建物の並びにソビエト最大の中央歴史文書館がある。その保管資料は主として帝制時代の政府関係文書であり、ロシアの政治史・社会経済史の研究者によって文字通りかけがえのない貴重な資料の宝庫である。

この重要資料の保管のため、この文書館の利用には科学アカデミーの特別な許可が必要とされる。外国人の利用者は申請してから審査を経て許可されるまでに三ヶ月くらいはかゝることが多いので短期間の滞在では利用し難い。許可証が与えられると外国人用の特別閲覧室での資料の閲覧が認められるが、入退場に際しては必ず警察官によって所持品の検査が行なわれる。こゝではマイクロフィルム申請の許可を得るのもむずかしい。利用者はいずれも必要な資料を手写している。筆者もこの閲覧室で帝制時代の第三課資料や裁判記録などを手写した。それらの資料の閲覧にあたって、学術協力者と称するライブラリアンに大いに助けられた。ホールをへだてたソ連人用の閲覧室には利用者たちがつまかけていたが、外国人用の閲覧室は比較的空いている。資料の多くがすでにマイクロフィルムに収められて保存されているのでマイクロ・リーダーも数台常備されていた。

〔ヴィリニウス〕

短期間ではあったが1977年3月に筆者の申請が認められてリトワニア・ソビエト共和国科学アカデミー図書館と同・国立歴史文書館を訪門することができた。

バルチック海に臨むリトワニア社会主義・ソビエト共和国は歴史的にはポーランドとロシアの両国の度々の支配をうけながらそのどちらにも属さない独自の民族的言語を保っている。首都ヴィリニウスを訪れて、その歴史の結果としての独得の混合文化を見ることができた。

1941年に設立されたリトワニアの科学アカデミーの付属図書館（Библиотека АН Литовской СССР）はヴィリニウスにある。本格的な大図書館で蔵書も多く、世界各国の図書館との交流に努めている。筆者はこの図書館で1860年代のリトワニアの社会活動家セラコフスキー関係の文献をしらべたが、その伝記はポーランド語で書かれているものとロシア語で書かれたものがあった。

また、リトワニア中央国立歴史文書館（Центральный государственный исторический архив ЛССР）では特に許されて1863年の反ロシア暴動期のヴィリニウスにおける警察調書やセラコフスキー関係の文書をしらべた。官庁資料はいずれも当時のロシアの統治下でつくられたものであり、ロシア語で書かれていた。しかし、民衆の蜂起を呼びかけている文書にはリトワニア語やポーランド語で書かれているものが多かった。

これらの資料を見るうちにロシア史の研究にとっても、隣接するこの地域の研究の必要性をあらためて感じさせられた。とりわけ1860年代のロシアの社会運動とポーランド、リトワニアの独立運動との関連は無視できない。

この文書館では館長ドーマス博士（Bentenas Domas）自らが出迎えて日本からの最初の研究者の来訪を歓迎してくれたが、資料のマイクロフィルムの注文はモスクワの科学アカデミーを通じなければならないとのことで、残念ながら、僅かな資料を手写するにとどまった。

以上、筆者が訪れたモスクワ、レニングラード、ヴィリニウスにおける歴史研究所、文学研究所、図書館、文書館などの主なものについて簡単な報告を記してみた。しかしここにとりあげた諸施設はぼう大なソ連の学術機関や施設のごく一部にであり、いずれも筆者の利用した一側面の記録にすぎない。この報告に意味があるとすれば、それは筆者が直接それらの利用者として実地に調べてきたことをもとにして綴ったということであろう。はじめにも記したように日本ではそれらについて従来あまりにも情報が少なかったためである。

以上の報告のなかでは触れなかったが、ソビエト科学アカデミーのあっせんで、科学アカデミー外の諸研究機関の二、三の研究者との交流も実現できた。たとえばモスクワではゲルツェンやユートピア思想の研究家として知られるヴァロージン博士（А. Володин）が筆者の要請にこたえてわざわざソ連邦史研究所にまで出かけてきてくれて研究上の助言と意見の交換をしてくれた。またレニングラードではレニングラード大学教授でデカブリストやナロードニキの研究家として知られるスチェパン・ヴォルク教授（С. Волк）が科学アカデミーの仲介で筆者の研究上の助言者を引きうけてく

今 井 義 夫

れた。いずれも極めて有益であった。

最後にこの紙上を借りて、筆者の渡航に当って激励してくれた故大塚金之助先生の学恩をしのび、また筆者のソ連での研究のために尽力してくれた大学の同僚や日本学術振興会の人物交流課の諸氏をはじめとする日本の協力者たち、ソビエト側で受け入れの仕事をしてくれた科学アカデミーの人々、とりわけ、モスクワの本部の渉外係ペチェネフ氏やペトロヴァ女史（И. Печенев, Т. Петрова）および、レニングラード支部の渉外係スミルノフ氏、（В. Смирнов）、リトワニアの科学アカデミーの渉外係のローマス氏（G. Romas）とシェフツォーヴァさん（Т. Шевцова）の御好意に心からお礼を申し上げたい。

これらの人々は筆者に国境を越える学術研究の交流という事業の尊さを身をもって教えてくれた。

Oct. 1977 Tokyo

（いまいよしお 本学助教授・経済学・社会思想史）